

道

魔

神

②

―――――――――――――――――― 演出ノート

平尾ひらおでも、ずっと昔むかしから村の辻むらつじに大きな
塞さいの神こやの小屋こやが作られ、中には「道陸神どうろくじん」と
呼ばれる丸い石まるいしを祀まつりました。子どもたち
は、小屋こやの中そなで、供えられた餅もちや菓子かしを食べた
ながら、楽しく遊びました。



③

演出ノート

塞の神が燃えつきたあと、道陸神の
丸石は来年まで土の中に隠しておくの
が慣わしでした。それは、この行事には
ご神体の道陸神をよその村から盗みに
くるという一種の冒険めいた風習があっ
たので、盗まれないように、誰にもないし
よにして隠しておいたのです。



④

演出ノート

ある年、この道陸神どうろくじんが誰だれかに盜ぬすまれて
しました。村の人おおさわたちは、大騒おおさわぎ
をして村中むらじゅうくまなく探さがしましたが、ど
うしても見つかりませんでした。

(間)

そして何十年かが過ぎすてしまいまし
た。
ひきながら
ゆっくり読よむ



⑤

演出ノート

平尾村の隣の金程村に直吉という男が住んでいました。ある年の正月のことでした。小野路村（現町田市）の親戚の家へ年始の挨拶に出かけたまま、行方知れずになってしまいました。家の者や近所の人たちは心配して、親戚や、知人の所を尋ね歩きましたが、栗木村の親戚へ立ち寄ったあと、小野路村には姿を見せないまま、どこへ行つたのか、神がかりにでもあつたように、ぶつりと消えてしまったのでした。



直吉の女房のすえは嘆き悲しみ、この

演出ノート

上は神仏にお頼みするより方法がないと、行者に占つてもらいました。行者は一心に祈り

「直吉は生きている。だが若い頃に神仏のお心にそむく行いをした罪で、今道に迷い、遠方をめざして歩いている」と告げました。

生きていると聞いて、すえはほつと安心しました。

「夫はどこにいるのですか。いつ帰つてきますか。」

すえは、早く夫の無事な姿が見たいと、たたみこむように聞きました。

すると行者は、

「よく信心をして、神仏に祈りなさい。一生懸命に神仏にお願いをすることだ」

と教えました。

それからすえは、朝晩神仏を祀り、一心不乱に夫の帰りを祈り続けました。

(間)



⑦

演出ノート

何日かが過ぎたある晩、すえは不思議な夢を見ました。そこは、古い大きな

杉の樹が生い茂り、暗くてひんやりした

山の奥でした。

頭上高く、杉の樹の枝には数えきれない

ほど、たくさんの天狗がいて、枝から枝へ

とまるで猿のように飛び渡つてしているのでし

た。そして、その向こう、霧の中にぼん

やり夫直吉の姿が見えます。直吉は、

すえに気づかず、どんどん向こうへ歩いて

行きます。すえは夢中で叫びました。



⑧

— 演出ノート —

「お父さん、お父さん、こっちよ。
帰つ

て来て——」と。

すえは声を限りに叫びましたが、直吉
は振り向きもしないで、どんどん行つて
しまいます。

「お父さん」

ともう一度叫んだその声に、すえは目を
さました。全身汗びつしょりでした。
すえは不思議な夢を見たものだと
思い、なおいっそう信心をし、神仏に祈
りました。



⑨

演出ノート

そんなことがあって、四、五日後の夕暮

れ時、ひょっこり直吉が帰つてきました。

すえも子どもたちも大喜びです。直

吉はけがもなく無事でしたが、行方知

れずになつてからの事は、なにも覚えていません。



なんでも気がついたのは、神奈川県の

大雄山最乗寺であったというのです。

読経をしているお堂の中へ土足のまま入り、お坊さんにひどく叱られて、はつと

正気に戻り、気がついたと話しました。

それでもまだ充分にはきめ切れず、

夢遊病者のようにフラフラと歩きづけ、

何日過ぎたのか、町田にたどり着いた時

「あ、ここは町田だ」と、はじめて、はつき

りと気がつき、それからはもう一生懸命

歩いて帰つて來たと、直吉は話すのでした。



(11)

演出ノート

直吉が無事に帰り、家族も、村中の

人々も、ほつと安堵の胸をなでおろし、そ

れにしても不思議なこともあるものだと

話しました。

(間)

それから間もなく、平尾村の辻のお

地蔵さまの足もとに、丸い小さな道陸神

が祀られてあつたということです。

おしまい。



稻城の昔ばなし紙しばい 第5巻

脚本『稻城の昔ばなし』

稻城市教育委員会教育部生涯学習課編

繪 稲城市立図書館制作ボランティア「みかん」

指導 稲田善樹

付属資料監修 渡辺賢二

どうろくじん

道陸神

①

平尾村がまだ山に囲まれた淋しい農村
であつた頃のお話です。

昔から、お正月の楽しみのひとつに「塞の
神」の行事がありました。

塞の神は、左義長、どんどん焼きとも呼ば
れ、毎年一月十四日に行われました。

お正月の門松やしめ飾りを集め、竹やわ
らで円すい形の小屋を作り、十四日の

夕方に火をつけて燃やし、今年一年の
安泰と豊作を祈りました。

みなさんは、「稻城の昔ばなし」を知っていますか?

みなさん、住んでいた稻城にも、昔から語りつがれてきたおはなしがあります。
図書館では、このおはなしをおさんに届けたいと考えました。
そこで、その考え方で、稻城のむかしばなしを語りついでいることを願っています。

この紙芝居をおして、みなさんが稻城に興味をもって、稻城を好きになつて、そして、稻城のむかしばなしを語りついでいることを願っています。



現在の平尾の地蔵堂(平成30年12月撮影)



付属資料（必要に応じて紹介してください）

「道陸神」どうろくじんとは、「道祖神」どうそじん、「さそのかみ」ともよばれ、村への悪霊の侵入

を防いだり、旅する人を悪霊から守る神です。自然石で作られ、村境に置かれています。平尾の道陸神は丸い石です。「塞の神」の行事では、道陸神の上でお札などが焼かれます。道陸神は焼かれることで悪霊を除かれて浄化され、「塞の神」の行事は終わります。その後、道陸神はどこかの土の中に埋められて来年を待つのですが、その埋め場所は極秘とされていました。

写真は現在の平尾の地蔵堂の写真です。「稻城の昔ばなし」には平成18年に撮影された地蔵堂の写真が載っています。そこには丸い道陸神が写っています。

直吉が正気に戻った大雄山最乗寺は、箱根外輪山の一つ明神ヶ岳にある杉の大木に囲まれた曹洞宗のお寺です。一三九四年（室町時代）に了庵慧明禪師りょうあんけいみょうぜんじが開山しました。その弟子の明覚道了みょうかくどうりょうが怪力をもつた天狗てんぐだったとの言い伝えがあり、今も天狗達がお寺を守っています。写真は、最乗寺の天狗たちです。

直吉の妻すえがすがった行者は最乗寺の信者で、山の奥深くさまよう直吉を最乗寺に導いたのでしょうか。若い頃に神仏にそむく行いをした直吉。妻すえの祈りが直吉の反省を促し、直吉を正気に導いたのかもしれません。